日本哲学会林基金若手研究者研究助成
2020 年度助成成果報告書

「自然の醜さ」とは何か？：不快の感情に基づく解明

高木　駿

【研究の背景と概要】

近代美学では、「美しさ」が「善さ」の概念から独立したことに伴い、「悪」と混同されてきた「醜さ」も、独立した一つの概念と見なされるようになった。現代に入ると、醜さは、崇高との強い連関が発見され、美の範疇では理解不可能な芸術を説明するための美学的範疇として定着した。しかし、醜さは、崇高と関係しない場合もあり、芸術にのみ限定されるものでもなく、特に「自然の醜さ」が未解明のままに残されている。

それを受けて、本研究は、「自然の醜さ」に着目し、その醜さを、崇高と関わる／関わらないという分類のもとで解明することを研究課題とした。この課題遂行のために、本研究は、I. カントの美学理論を用いた。その理由は、カント美学の趣味論は、自然を対象とする理論であると共に、数種類の不快の感情に基づき、崇高と関わる醜さをも含めた様々な種類の醜さを説明することができるからである。

【具体的な課題の設定】

第一の課題として、『判断力批判』における不快の感情の類型に基づき、自然がもたらす不快の内で崇高と関わるもの／関わらないものを特定し、それらの不快に対応する「自然の醜さ」を解明する。まずは、『判断力批判』「美的判断力の分析論」の読解を通じて、崇高と関わる／関わらない不快の感情を分類する。つぎに、特に崇高と関わらない不快の感情を、感情を生み出すためにさまざまな仕方で働く心の諸能力（感性、構想力、悟性、理性）およびそれらの連関のあり方に照らして、さらに分類し、それぞれに対応する醜さを整理する。

第二の課題として、別種の不快の感情および醜さどうしの関係性を明らかにし、「自然の醜さ」の体系化を試みる。それぞれの不快を決定づけている心の諸能力の働き方・連関の仕方に着目することで、別種の醜さどうしであっても関係することができるのか、関係する場合には、そこに連続性、段階性、階級性などいかなる関係性が存在するのかを明らかにする。

【研究の成果と今後の課題】

第一の課題に対しては、構想力と他の心の諸能力との連関に着目し、まずは、構想力と理性との連関から崇高に関わる不快の感情を、つぎに、構想力と悟性、感性との連関から崇高に関わらない不快の感情を分類した。結果として、理性的な快を引き起こす感情、感覚的な快適さを欠いた感情、調和的な整然さを欠いた感情を内実とする不快と、それぞれの不快に対応した「自然の醜さ」として、崇高を惹起する醜さ、生理的な嫌悪の醜さ、乱雑さの醜さを整理することができた。しかし、この整理は、その方法が認識論的はものであり、認識論の枠外にある醜さ、例えば、理解不能な、吐き気を催させる醜さや空想としての醜さを捉えることができなかった。それらの醜さが自然にはありえるのかの検討も含めて今後の課題とする。

第二の課題に対しては、第一の課題の成果をもとに、構想力を基軸として、別種の不快の感情および醜さの関係を検討した。特に注目したのは、構想力と悟性との連関から生み出される不快の感情（感覚的な快適さを欠いた感情）と、構想力と理性との連関から生み出される不快の感情（理性的な快を引き起こす感情）との関係である。この二つは、対象の乱雑さ・複雑さが高度になるのに対応して、前者が後者に変容するという仕方で、グラデーションを構成することがわかった。第二の課題については、これ以上の遂行が叶わなかった。他の醜さどおしの関係や、優劣、体系を網羅的に検討することが今後の課題となった。

以上